

在日タイ女性とつながる —オリエンタリズム批判の再検討を通じて—

企画者：齋藤百合子（大東文化大学）

話題提供者：江藤双恵（獨協大学）

話題提供者：新倉久乃（フェリス女学院大学大学院博士後期課程）

司会：齋藤百合子（大東文化大学）

企画趣旨（目的）：日本に在住する多様な背景をもつタイ女性たちとつながり、彼女たちが直面する課題をともに考えるためには、オリエンタリズムにもとづくステレオタイプ化されたタイ女性のイメージを払拭することが肝要である。そのうえで、出身国タイと居住国日本における彼女たちの仕事や家族をめぐる経験や、彼女らを取り巻く規範をインターセクショナルな視点で分析するために必要なフレームづくりのための問題提起を行う。

企画の背景

齋藤百合子は、本企画の背景として「タイ女性に対するオリエンタルなまなざしを超える一的人身取引から移民へのフレームワーク試論」を報告する。まずタイ人女性に対して日本社会で向けられてきたオリエンタルなまなざしを批判的に検討した上で、さまざまな経緯で来日したタイ人女性をインターセクショナルな視点で分析を試みる。そして日本社会の権力性を批判的に捉え直す作業も共に行いながら、差異からつながりへの道筋を探る。

話題提供

江藤双恵は、タイ地域研究の立場から、特筆すべきタイ女性の生産活動への意欲の高さと経済的役割の大きさ、それらを支える社会的文化的要素について報告する。タイ女性の経済的役割は非常に活発で、富裕層女性の社会進出は目覚ましく、他方、貧困女性の家計貢献責任の強さは女性の就業や出稼ぎの動機づけの一つとなっている。日本に移動してきたタイ女性たちが直面する生きづらさについて、齋藤報告におけるインターセクショナルな視点の重要性を再確認し、日本社会・文化とタイ社会・文化の両面から理解する必要性について述べ、新倉報告につなげる。

話題提供

新倉久乃は、「国境を跨ぐジェンダー規範—移動を生きる在日タイ女性の価値観の変容」として、1990年前半に来日した在日タイ女性のタイの家族の中で娘役割、日本の家庭の中で妻・母親役割に注目して発表する。女性たちは、この30年間に国境を跨いでどのようなジェンダー規範の中で生きてきたのだろうか？女性たちは、それぞれの国のジェンダー規範を自分の価値観に取り入れ各役割を担い、現在は国際移動の帰結としての高齢期の準備に直面している。女性の各ライフステージの選択とこれまでのタイと日本の家族関係の非対称性、法的制約、福祉制度に埋め込まれるジェンダー規範の交差する関係性を分析する。